

書評：

ミャンマーの熱い季節

浅沼 信爾
一橋大学客員教授

Thant Myunt-U, 2006, *The River of Lost Footsteps: Histories of Burma*, New York: Farrar, Straus and Giroux

Pascal Khoo Thwe, 2002, *From the Land of Green Ghosts: A Burmese Odyssey*, London: HarperCollins Publishers

今、ミャンマーにまた熱い政治の季節が到来している。軍事独裁政権下における民政移管と民主化、そしてそれに伴う国の開放政策の試みだ。しかし、政治改革と民主化の動きは過去にもあった。ヤンゴンでの元国連事務総長の故ウ・タントの葬儀を邪魔したネ・ウイン政府に対して学生が暴徒化した1970年代末のウ・タント暴動の時、またネ・ウインの「引退」と獅子将軍として恐れられたセイン・ルイン将軍への権力委譲の時の有名な1988年暴動の時、もっと最近では物価値上げが引き金になって起こった2007年の僧侶の反政府抗議運動だ。民衆が軍事政府の暴政に抗議して立ち上がった後では、いつも政治改革と民主化の動きがあったが、いつも裏切られてきた。そして、アメリカやヨーロッパ政府のそれに対する反応は、いつも経済封鎖の強化だった。首都をヤンゴンから遠く離れた山中のネピドーに移してまで鎖国政策を続けようとしている軍事政権に、経済封鎖で応じるのは、ミャンマーの鎖国政策・孤立政策を幫助しているに等しいのに、だ。

わたくしは、ミャンマーは” never misses a chance of missing a chance” の国だという印象を持っているが、それでも「今度は違うかも知れない」という期待と、「また裏切られるのではないか」という失望の予感を抑えられない。

最近一といっても、もう5年も前になるが一元国連事務総長、故ウ・タントの孫に当たるタント・ミントーウが、ウ・タント家の歴史や自身の回想を混ぜて、ビルマ/ミャンマーの歴史物語を書いた。これが、上に挙げた『失われた足跡』という本だ。本のジャケットは、「叙情的な、しかしドラマティック」な語り口だと賞賛しているし、わたくしは書かれている英語の文章の美しさにすっかり魅せられた。ウ・タントは、日本ではいつも「ビルマの高校教師だった」と紹介される。確かに、彼は経済的理由でラングーン大学を2年でやめて、故郷で高校教師をしていたが、ジャーナリストとしてビルマの独立運動に関わって来た。そして、アウン・サン将軍が独立を見ないで暗殺された後、ウ・ヌーが首相になると、ウ・タントを自らのプレス・セクレタリーに指名した。その後、ウ・タントは、ビルマが国連に加盟すると、国連大使になった。政治家でも官僚でも学者でもなかったが、アウン・サンやウ・ヌーを支えたテクノクラ

ートの一人で、早くから独立運動の一員だった。その孫のタント・ティン・ウは、生まれはラングーンだが、アメリカ育ち、ハーバード大学とケンブリッジ大学で教育を受けている。

ビルマ育ちでない彼が、ビルマの歴史を書く契機になったのは、国際政治の場でされるミャンマーに関する議論が、歴史的な背景や要因を考慮していない「没歴史的な」議論だという決定的な欠陥があると感じるようになったからだ。表題に Histories と複数の歴史が挙げられているのは、彼はどうもビルマの歴史には非連続なところがあると感じているからかも知れない。

1885年にビルマの最後の王ティボウがイギリスの東インド会社軍によって追放されるまでの数世紀は、ビルマ族だけでなく、今日のビルマの少数民族であるアラカンやシャン、それにカレン等の民族を出身母体とする王朝が興亡を繰り返す歴史だった。最後には、ビルマ族の王朝が覇権を確立し、一時は東はタイと中国の雲南省、西はバングラデシュのチッタゴンやアッサムのマニプールまで版図を広げたこともあった。

それから、1948年のイギリスからの独立まで、イギリスの植民地としての一しかも屈辱的なことに、インド政府の一介の辺地州としての一隷属の時代がある。これが、ビルマの歴史の第二期だ。その間、ビルマは米、木材、ルビー等々の一次産品を世界に輸出する経済として、ラングーンはその輸出活動の拠点として栄えた。インド人の商人や産業家が多く入り込み、後にファーニバルが複合経済とか複合社会と呼んだ多民族経済ができあがった。多分、この時代には、日本軍のビルマ占領も入るのだろう。それからは、日本の敗戦とイギリスの再占領、そしてイギリス政府との交渉を経ての独立がある。

ビルマの歴史の第三期は、第二次世界大戦後の独立共和国時代だ。本来なら、ビルマの歴史でもっとも幸福な時代であるべきだったこの60年は、貧困と悲惨と恐怖と絶望をビルマ国民に与えた時期のようにわたくしには思われる。ビルマ独立の立役者として、アウン・サン、ウ・ヌー、ネ・ウインの三人の名前が挙げられる。わたくしは、ビルマの独立闘争の歴史をロシア革命史に擬えると、アウン・サンはレーニン、ウ・ヌーはトロツキー、そしてネ・ウインはスターリンのような役回りだったのではないかと推察している。そして、アウン・サンは独立前に、誰かに暗殺された。ウ・ヌーは、アウン・サンの後継者として新共和国の首相になったが、ネ・ウインのクーデターで政府から追放された。それは、1962年のことだが、ネ・ウインが覇権を掌握したことがそれ以降のビルマの不幸な運命をもたらしたような気がする。それ以来ビルマ（国名は後にミャンマーに改名された）の運命は下降線を辿っている。

ネ・ウイン率いる軍事独裁政権の暴政・圧政に対して数多くの反乱・暴動があった。ビルマ族の支配と差別に反対するシャン、カレン、カチン等の民族反乱軍の活動も続いていた。そのたびに一そして驚くことに、皆が待望していたネ・ウインの死去後も一圧政と鎖国は続けられてきた。現状は一極端な単純化を怖れずにあえて特徴づける

とすれば一軍事政権は、ますます孤立の度を深め、ネピドーの荒野に籠城作戦を展開している。歴史的にビルマが弱体化すると侵略するのが常であった中国（雲南省を通じて）とインド（最後は東インド会社を通じて）は、今度は経済的な進出に余念がない。アメリカ、ヨーロッパ、そして一日米同盟を理由に常にアメリカの尻馬に乗る、あるいはそうするのが国益擁護だと信じる一日本は、籠城を解く効果があるかどうかの検証なしに、人権外交の大義名分のもとに、経済制裁を続けている。

この本が書かれた時期にも関わりがあるかも知れないが—この本には 1988 年暴動のことが詳しく書かれていない。アウン・サン・スー・チーが政治指導者としてミャンマー国民の前に現れたのはこの時だ。それを補うのが、最初に挙げた二冊目の本、パスカル・クー・テュエの『緑の幽霊の国から』だ。彼は、カヤ・パダウン族と呼ばれる山岳少数民族に生まれ、最初はカトリックの神父になるための教育を受け、その後マンダレー大学で英文学を学ぶようになった青年だ。将来大学の教員になるのが夢で、ノンポリ学生だったが、1988 年学生暴動の時に、ビルマ族の恋人の学生活動家が反政府分子として警察に拘束され、暴行され、そして最後には「消されてしまった」のを契機に、反政府運動に身を投じ、他の多数の学生とともにゲリラとなってカレンのジャングルに入る。そして、マンダレーでアルバイトをしていた時に偶然出会ったケンブリッジ大学の教授に助けられて、タイ経由イギリスに渡り、ケンブリッジ大学で英文学の学生になるという、まことに数奇な運命を辿る。その半生を自伝的に書いたのがこの本だ。

マンダレー大学に入っても、度重なる政府の大学閉鎖によって、まともな教育を受けることのできなかつた著者が、またなんと詩的な美しい英語の文章を書けるようになったことか。最初の山岳民族の暮らしを、思い出とともに書いた第一部では、自然描写とその自然とともに生きるパダウン族の生活が、牧歌的に描かれている。第二部は、ミャンマー第二の都市、マンダレーでの大学生活が記録されている。恋人との出会いや貧乏このうえない同棲生活の甘酸っぱい時間と同時進行で、精神的に追い込まれて、ついには森に入って反政府運動に身を投じざるをえなくなる軍事政府の暴力の展開が主題だ。ジャングルでの逃避行と戦闘の様子も克明に書かれている。

しかし、わたくしが、背筋が凍るような衝撃を受けたのは、ジャングルに入った学生がカレン反乱軍の本拠地で開いた学生大会だ。70 数名のビルマ族、シャン族、カレン族等々出身の学生が、今後の反政府活動の戦略を話合う目的で集まったジャングル集会だった。集会は三日続いたが、何等の有益な結論は出てこなかった。自分のグループを代表してこの会議に出席していたパスカル・クー・テュエは、学生の議論を聴いているうちに、「自分たちは、軍事政権の連中と同じではないか」と驚きを持って自覚する。ミャンマーでの生活も教育も—そしてカトリックという宗教でさえも—権威への服従と従順の美德を教え、人々から自分で考える自由を奪ってゆく。そのような生活を送って来た自分たちは、反乱に身を投じて、自由を手に入れても、自分で考えることができず、まさに軍事政権と同じように、スローガンを叫び、そうすることによ

ってスローガンがすぐにでも実現できると信じるのだ。自分で作ったプロパガンダが、自分の中で現実になる。これこそは、「幻影の政治(Politics of Illusion)」とでも呼べるもので、自分たち反乱学生も同じ自己欺瞞に満ちた幻影の政治をしている。ただ、軍事政権側か、反政府かというのが違うだけだ。ジャングルでのゲリラ生活は、狂気なしには続けられない。その狂気を打ち消すこのような覚醒した自覚をもったパスカルは、迷いながら仲間と別れて国を出る決意をする。もちろん、ケンブリッジ大学教授の助けがあって始めてできたことではあるが。

これからミャンマーの政治はますます熱くなるだろう。ミャンマーの国内政治の主役はミャンマーの人々だ。しかし、国際的な影響も無視できない。ミャンマーに近い中国やインド、ASEANの国々、それにアメリカ、ヨーロッパ諸国、日本の対ミャンマー政策にも変化が顕れるだろう。新しいミャンマー情勢に対応した新しい外交政策を作る時に、長い歴史の視点から今ミャンマーで何が起こっており、国際社会は何をすれば本当にミャンマーの人々の手助けになるのか—政治家にも外交官にもじっくりと考えてほしい。間違っても、中国やインドに先を越されては大変だ、というような単細胞的な反応だけで対ミャンマー政策を作ることは止めて欲しいものだ。そのためにも、このような良書の日本語訳が出版されていないのは、実に残念だ。